

我儘なレジデント

A la Indulgence

我儘なレジデント

1996年3月20日 初版発行

著者＝松岡なつき

発行者＝孝壽芳春

発行所＝芳文社

〒112 東京都文京区後楽1-2-12

電話 03-3815-1521(代表)

振替 00110-8-174056

印刷所＝株式会社 光邦

製本所＝株式会社 セイコーカイン

ISBN4-8322-1211-7

装画＝鳥羽笙子

装丁＝TAKESHI MIZUTANI

HANA
OTO
NOVELS

松岡なつき

我儘なレジデンス



CONTENTS

我儘なレジデンツact.1	3
我儘なレジデンツact.2	177
ナイトシフト	201
あとがき	221

初出一覧

我儘なレジデンツact.1	書き下ろし
我儘なレジデンツact.2	『小説花音倶楽部』1号(1994/11)
ナイトシフト	『小説花音倶楽部』6号(1995/11)

松岡なつき

我儘なレジデンス



【レジデント】免許取得後、専門分野の訓練を受ける有給常勤の医師のこと。研修医。

「検温は済ませてゐるわね？」

「あら、西村さん、まだ食事中なんですか」

「先生達が来る前に、胸を開けて診察しやすいようにして下さいよ」

火曜日、朝九時半近くになると、看護婦の動きが急にきつぱきとし、慌ただしいものになる。それもそのはず、毎週この時間は東条大学付属病院第一外科病棟の教授回診が行なわれるのだ。

一旦、看護婦達がナースステーションに引き上げ、何となく病室内がガランと寂しくなったと思うのも束の間、今度は三十名ほどの白衣の集団が一斉にザアツと患者達を取り囲む。ベッドが部屋の殆どを占める病室の狭い空間には、さすがに入りきれない人間もいて廊下の方にはみ出していた。にもかかわらず、おそらく教授のいるだろう方向をひたすら一心に凝視している彼らの様子は、冷静に考えればかなり異常な光景ではないだろうか。「……よって、高田さんの術後の経過は順調で、点滴による体力回復を図っていると

です」

「ふむ……」

まるで震えるような小声で、何とか病状を説明する研修医に、外科部長である森本三郎教授はカルテを取り上げ、なるほどというように物憂げに頷いた。

その間、看護婦達や薬剤師、そして大学から来ている実習生達の視線は、ベッドの上に横たわる患者に突きささっている。

その患者は居心地悪そうに、ごくりと唾を飲み込んだ。これまで幾度もこの回診を体験しているが、いまだに慣れることができない。偉い教授を前にして担当医師がコチコチになるのも判るが、この時間は患者にとってもひどく息苦しく緊張する一刻だった。いつもは親しげに声をかけてくれる看護婦達の顔も強ばって、まるで見知らぬ人のように感じられるほどだ。

「よし、お大事に……次」

だから、森本教授がそう言って足を踏み出したときには、担当をしている研修医も、患者も同時に安堵の溜息をついていた。

ただ傷口を眺めるだけで、ほとんど診察らしきことをしない教授の一行は、すぐに次の

病室へと移っていく。

こうした大部屋にいるのは、術後であっても回復期に入った患者達なので、本当はこんな大仰な回診などは必要がなかった。これは、偏に森本教授の権威を示すためのデモンストラーションなのである。もちろん、こうした回診をする全ての教授がそうしているというのではない。ただ、森本という男に限って言えば、これは儀式のようなものであり、決してそれ以上の意味を持つものではなかった。

（しかし、まあ教授職へ辿り着くまでの苦難の道程を思えば、それぐらいの褒美ほうびを自分にやってもいいと思うのだろうか……）

研修医として勤務して二年目——ひきずみ久住隆は面白がるような眼を森本の後頭部に当てながら思った。

そんな彼に、ふいに森本の声がかかる。

「久住君、この患者は君の担当だったね」

「はい」

表情をさつと改めて、隆は教授の前に進み出た。恐れる気もなく、堂々とした態度で。「そろそろ退院させても思っておりますが、白血球の数値が高く、その点が気になり、

山崎先生のご意見を伺おうとしていた所です」

隆の患者は虫垂炎ちゅうすいえんが悪化し、穿孔せんこうを起こした挙句、腹部に膿瘍が拡がり、危うく腹膜炎を起こしかけた所を運ばれてきた。手術があと少し遅ければ、取り返しのつかないことになっていたはずだ。たかが盲腸と侮ることはできないのである。

「君自身はどう思うね？」

森本は隆の顔をじっと穴が開くほどに見つめた。これが、もし先程の気弱な研修医であれば眩暈を起こし、昏倒しているところだろう。

しかし、隆は冷静そのものの表情で答えた。

「副腎不全ではないでしょうか。術後で感染症を引き起こしやすくなっておりますし」

森本は軽く頷いた。どうやら隆の見立ては彼の意に叶ったらしい。しかし、森本はそこで隆を解放しようとはせず、さらに質問を重ねた。

「ふむ……で、その場合の対処法は？」

「詳しい検査の結果、副腎不全と判明しましたら、まずステロイドの投与を始めます。すでに感染症を起こしているのなら、抗生物質の種類も変えます」

隆は自分と同じ研修医達や看護婦、そして自分より『上オウヘンの』医師達が注目していること



に気づいていたが、齒牙にもかけなかった。隆の神経はザイル並みに太く、大抵の人間がナーヴアスになつてしまふような局面を、むしろ愉しむような所がある。そんな彼が森本教授と言葉を交わすことぐらいで怯んだりするはずがなかった。

「よし」

森本は目を細めた。

「抜かりなく勉強してきたようだな」

隆はにつこりと微笑んだ。

「山崎先生のご指導のおかげです」

「ふむ、山崎君も熱心な男だからな」

森本の言葉を聞いて、山崎も嬉しそうな顔になる。

「いや、結構、そういう所はどんどん見習わなくてはならんよ、久住君」

「はい」

隆は神妙に頷いてみせた。別に山崎に対して、本当に恩義を感じている訳ではなかったが、関係を良好に保つにはこれぐらいのリップサービスは必要だろうと思う。

（そう……これだけ上下関係が厳しい世界じゃ、目立ちすぎるのもまた命取りだからな）

大学病院で勤務している者にとって、教授の覚えがめでたいということ以上の祝福はない。まるでスルタンの寵愛を一身に集めようとするハレムの女達さながらである。ここを出て開業医になろうとしている者ならともかく、研修医から医局員になり、さらには講師に、そして最後には教授職へつきたいと夢を描いている者は、まず教授に気に入ってもらわなければ、その最初の出世の階段に足をかけることもままならないのだ。

そして久住隆こそは、まだ研修医の身分でありながら、まぎれもなく森本教授の『お気にいり』と言える存在だった。隆の父親が森本の同窓生で、子供の頃から知っていたので親しみがあるし、才気走った隆という青年を手駒にして、後々自分の役に立てたいという考えが森本にはあったからである。

森本は普段から自分の思惑を隠そうともせず、隆に接していたから、周囲の人間もそのことには気づいていた。もちろん、他の医師達もそんな隆の立場を羨ましく思っているのだが、不思議と彼に対する激しい嫉妬心や、憎悪などが噴出する様子は見えない。

それが久住隆の最高の長所だった——端正な面立ちをし、明るさと爽やかさ、そして大らかな男らしさを感じさせる彼は、性別を問わず、大抵の人間から好意を引き出してしまう魅力の持ち主なのだ。女なら隆を恋人にしたいと考え、男ならばこんな友達がいれ

ば面白いのにと、つい思わせるようなタイプなのである。

いつものように教授回診が終わった後は会議室に入り、担当患者の治療に対する詳しい質疑応答が行なわれる。

「おい、久住、どこへ行くんだ？」

ふいに踵を返した隆を見て、同期の山本が驚いたような顔になる。

「タコ部屋にノートを忘れたんだよ。先に行つててくれ」

隆は首だけ巡らせて言うのと、それきりすたすたと歩み去ってしまう。『タコ部屋』というのは隆達、研修医全員が押し込められている当直室の隠語だ。

山本はすらりとした隆の後ろ姿に声をかけた。

「あと五分しかないぞ。ダッシュだ。ダッシュ！」

「おーよ」

しかし、隆の悠然とした歩みは変わらない。

山本は溜息をつくくと、呆れたように呟いた。

「ほんと、あいつの心臓には毛が生えてるんだろうぜ……」

その通りだった——隆が向かっていたのは、実は『タコ部屋』ではなく、同じ階にある形成外科病棟なのである。

「ねえ、君……中務^{なかつかさ}先生はどこ？」

ナースステーションにひよいと顔を出した隆は、一番手前に立っていた看護婦に微笑みかけた。

「病室の方だと思いますけど……」

看護婦はまじまじと見つめられて、僅かに頬を染める。彼女はもちろん隆が何者であるか知っていた。やはり年ごろの看護婦達も、独身で才能豊かで『見栄え』のいい医者に目をつけるのは早いからだ。

「ありがとう」

隆はもう一度、笑みを閃かせると、顔を引っ込めた。

今度は看護婦の方が慌ててナースステーションから廊下の方に首を出す。そんな彼女の背後から同僚達の声がした。

「あんだ、声をかけてもらってラッキーじゃん」

「ほんと、久住先生って素敵……」

「うん、うん。中務先生もいいけど、また別の魅力があるんだよね！」

「いい意味の『類友』ってやつ？ 二人で並んでると、ああ、どっちにしようって思っちゃうわあ」

看護婦達は揃って悩ましい溜息をついた。こんなに熱っぽく見つめているのに、隆は背後を振り返ろうともしなかったからである。

「春彦」

さほど離れていない病室の一つから現れた友人の姿を見つけて、隆は声をかけた。

中務春彦はハツとしたように顔を上げ、隆に気づくと微かに口元を緩ませる。

「隆……どうしたんだ？」

看護婦達が言っていたように、この二人の青年はそれぞれ異なった魅力を兼ね備えていた。

隆の容貌が力強く、生き生きと明朗な印象を与えるならば、この春彦は優しく、そして物静かな美貌の持ち主だと言えるだろう。彼らに共通しているものといえば、その瞳に宿る理知的な光だが、それにしただって春彦の方が随分と柔らかかった。しかし、二人の異

